

【書評】

菊池繁夫・上利政彦編
『英語文学テキストの語学的研究法』

九州大学出版会、2016年4月(A5版・並製・368頁。4,800円(税別))

鈴木 章能

アメリカ比較文学会は2003年、過去十年間の比較文学研究と教育の状況や課題をまとめ、文学の文学性、文学テキストの言語への回帰を声明として発表した。文学研究が久しく文学テキストそれ自体から背を向けてきたためである。その裏には、主に比較文学研究の領域で生まれ発展した文学理論が文学テキストの字義の意味を軽視もしくは抑圧してきたという判断がある。テキストに向き合って読み、そこに書いてあることを解釈することとは、読み手の予備知識の自閉的な確認に終始する行為のことではない。テキストから異議申し立てを受けながら予備知識が絶え間なく修正されていく過程が伴う行為である。もっとも、解釈という行為が多かれ少なかれ読み手自身に引きつけて行われるものである限り、解釈はテキストの字義の意味をどれだけ重視しても多かれ少なかれ寓意的になる。その妥当な範囲を巡って、古今東西で様々な議論が行われきた。西洋では、たとえば聖書を巡ってアキナスやアウグスティヌスやルターらをはじめ数多の人々が、東洋では、たとえば『詩経』を巡って韓愈や朱熹や顧頡剛らをはじめ数多の人々が。そして、(多様性の尊重に関わる諸理論を援用して)行き着いたのが、テキストの意味は個々の、あるいは文化集団ごとの読者の主観に過ぎないという見方であった。しかし、妥当な解釈の範囲はあるし(なければコミュニケーションはもちろん、他者理解や比較も不可能である)、テキストには、ウンベルト・エーコが述べたとおり、テキストの意図がある。

ここにおいて、そして、文学テキストの言語への回帰の時代において、言語と意味を巡って解釈学、現象学、文献学、翻訳学、文体論といった諸領域の見地と議論に大きな期待がかかる。また、テキストと一言で言っても、テキストは構造言語学上、音素→形態素→語→文→言説といった諸レベルから成り、それら諸レベルもまた各々テキストであると考えられるゆえに、各レベルのテキストやレベル間の関係について考えることも重要になる。

一つの論文を書くには、最低でも過去十年間の先行研究はおさえ、研究がどのように進み、何が問題となってきた、何が取捨され、また見落とされてきたのかを知っておく必要がある。久しく文学テキストから背が向けられてきた時代を経たいま、どのように文学テキストの言語に向き合い迫るのか、見取り図と手引きが求められよう。

菊池繁夫・上利政彦編『英語文学テキストの語学的研究法』は、そうした要望に十二分に応えてくれる強い味方だ。「まえがき」には本書の目的が次のように記されている。「研究者が『語学』的見地から文学テキストを論じるにあたって、高いレベルの『論文』を書くための指針となるように、その方向性を示すこと」(p. i)。ここで述べられる、また書名にもある「語学的」という言葉には、文献学、言語学、文体論の三者を「包含した上位語としての意味」(p. i)があり、したがって、本書は文学テキストの言語にその三領域から向き合い迫る見取り図と手引きとなっている。

その作りは実に懇切丁寧なものである。

本書は文体論の定義で幕を開ける。文体を研究する学問が文体論であるという一般的な認識傾向に対し、文体の研究には大きく二つあり、すべての言語現象の文体を扱う「文体の研究」と、文学の中で用いられた言語現象としての文体を扱う狭義の「文体論」に分けることができると、諸文献による傍証とともに、明確な定義づけが行われる。続くセクションでは、文体論に力点が置かれ、研究の展開がギリシア・ローマの時代から通時的に示される。ここには西欧の諸言語圏の主だった研究が網羅され、文体論の発展の歴史とともに様々な方法論が確認できるようになっている。時代区分

が20世紀後半に至ると、今度は多岐にわたる方法論が共時的に示される。現代の文体論は1960年のRoman Jakobsonによる“Linguistics and Poetics”を嚆矢とし、ここから言語学が文学テキストの研究に加わる。1960年代には生成文法、1970年代には談話分析と語用論が有効な分析手段となり、テキストより読者に力点を置くFishやIserの受容理論の影響も加わって、「形式的なテキストへの関心から、文脈も含めた談話へ」と関心が移り、「文脈が考慮されることから」、「そこに秘められたイデオロギーにも」(pp. 40-41)関心が向けられるようになっていった。こうした流れに沿いながら、テキスト言語学、ナラトロジー、フェミニズム文体論、情動的文体論、音声文体論、コーパス文体論、認知文体論、テキスト世界理論のほか、教育的文体論なる英語文学と英語教育を橋渡すものとして位置づけられた文体論まで、あらゆる方法論が紹介される。

もっとも、第1部は単なる方法論の見本市になっているわけではない。各分析方法や理論の長所と短所や限界のほか、筆者の鋭い問題提起が記される。一例を挙げてみよう。筆者曰く、20世紀の後半まで、研究者たちは「文学テキストを現代でいうコーパスと見ていた」(pp. 24-25)。言い換えれば、「話された言葉と書かれた言葉の区別」こそあったものの、「文学テキストにおける話し言葉の部分は、そのまま自然言語の話し言葉と同一であると見ていた」。そのため、「文学と非文学、あるいは虚構と非虚構、といった側面での言語使用域」の「区別」がなされず(p. 25)、文学テキストの個の語りの研究と時代や社会の語りの研究の領域境界がぼやけたままになってきた。したがって、現代言語学の観点からの文体への伝統的アプローチは「文学言語の特性を包括的にとらえるには至っていない」(p. 27)。文学テキストの言語的特性が「社会における一つの集団もしくは一つの時代を反映していると見られるなら」、その場合は、「社会言語学的な文体」(p. 28)の研究である。「文体論」とはそうではなく、文学テキストの「最終的発信者(=作者)の言語的特徴」をとらえようとすることである。しかし、ナラティブ分析においても、文学で通常区別される語り手と作者を区別せずに分析が行われてしまう場合がある(p. 44)。もっとも、その一方で、文体に対す

る文学的アプローチは、「文学という文脈の中でその言語の一般的特徴をとらえては来なかった」(p. 27)。筆者曰く、文体論の「目的は、そのテキストの形式的諸特徴を記述するにとどまらず、その形式的諸特徴がいかなる機能的な意味合いを、その文学テキストの解釈上持つのかを見て行くこと」にあり、「文体論の役割は文学的効果を言語的諸特徴と結びつけることにある。そのような役割のために、文体の研究は方法論として言語学のモデルやその用語を用いる」(p. 27)のである。したがって、文学テキストを対象とする狭義の文体研究たる「文体論」では、文学と言語学の両アプローチの「重なり」(p. 28)が重要となる。

この点においてバランスの取れた国内外の秀逸な研究論文が、文体論研究を行うにあたって必読の論文として第2部で紹介される。どのような論文がどのような点で世界的に重視され、世界的にどのような位置づけがなされているのか確認できるほか、諸論文は第1部で通時的・共時的に確認した様々な方法論をカバーしているため、必読とされる国内外の代表的な論文の解題を通して、様々な文体論の方法を具体的に、かつ高い次元で学ぶことができる。

第2部はまず、文体論研究における3名のイギリスの大御所が各人のテーマに沿って選んだ論文を解題する。最初は Geoffrey Leech が語学的観点から10編を解題する。続いて Michael Toolan が、「出版されるに値する論文やテキスト分析の論文として」、「読み手がそこで論じられた手法を自分の手近なテキストに応用してみたく思う、あるいは論じられた作者や作品についてもっと知りたく思うような論文」(p. 84)という基準で11論文を選び、解題する。どのような論文の登場が世界で待たれているのかがわかる点で研究者にとって参考になる。三つ目は Jean Boase-Beier による解題で、翻訳学と文体論の歴史的発展を軸に秀逸な論文が六つ挙げられる。翻訳研究が世界的に盛んな今日、この解題もまた有益である。海外の論文解題の後には、第1部で示された様々な方法論をカバーする形で、各々の方法論における日本の代表的な論文が解題され、各方法論を具体的に、質の高い見本とともに学ぶことができる。なお、編者によれば、文体論の領域では書

籍の解題こそすでにあるものの、論文の解題というのは過去に例がないとのことである。

続く第3部には、二人の編者による論文が計4本収められている。それぞれJames Joyce、Sir Thomas Malory、*Tottel's Miscellany*、John Miltonを巡る論考で、どれも前章の解題に入れられていい優れものである。各論の秀逸さに負けず劣らず優れているのは、第3部の編集方法である。四つの論文で古英語から中世・近世、そして現代の英語までをカバーしている。すなわち、第2部で論文の解題を通して様々な文体論の分析方法を具体的に示した後、第3部では力点を英語の歴史的様態の網羅に移し、前章に増して具体的に論文そのものを提示することで、様々な時代の英語文学を専門とする読者に資する工夫がなされている。

最後の第4部では文献学的な観点から英語の辞書が歴史的に読まれる。本書で用いられている「語学的」という言葉の意味にある「文学学」の研究方法が論文を通して具体的に学べるようになってきていることはもちろん、論文で扱われる様々な語彙の変遷が非常に興味深い。本書に一貫して言える「論文で学ぶ、論文を学ぶ」という工夫が第4部でも如何なく発揮されている。

『英語文学テキストの語学的研究法』は、本書を手取る研究者の視点に立ち、目配りと気配りが非常に行き届いた良書である。その懇切丁寧さと真摯さはかなり細かなところにも見て取れる。たとえば、第2部で、なぜイギリスの3名の研究者が論文を解題したのか。こういう場合、筆者の友人がたまたまイギリス人ばかりであったというのはよくあることだが、本書は違う。文体論はそもそも古いテキスト研究、文献学的な研究から発展した。不明の言語の究明のためである。アメリカでは初期文学といっても不明な言語で書かれているわけではない。したがって、アメリカ文学の場合はテキストの内容に焦点が当てられることになり、一方で「アメリカで不明の言語といえば先住民族が使っている言語で、その言語学的な研究という分野が確立し」、アメリカでは文学研究と言語学という形の二極化が起こった。そのため、「イギリスでのように文学テキストの語学的研究と

いう分野が発展しなかった」(p. iii)。したがって、文体論の論文解題はイギリスの研究者にお願いしたということである。ほかにも例を挙げれば限がないが、本書の懇切丁寧さと真摯さは一読すればすぐに気づくはずだ。

常に読者の立場に立ち、細かなところにまで目配りと気配りが行き届いた本書は、「研究者が『語学』的見地から文学テキストを論じるにあたって、高いレベルの『論文』を書くための指針となるように、その方向性を示すこと」という目的が十分達成されている。文学テキストの言語への回帰の時代、頭も心も満たされる極めて有益な書である。

—すずき あきよし・長崎大学—